

八九

百五

奇談

本宗

卷之三

山中文庫



驗
府

遠山寺詣序

わを門へだちろふとゆふ
えむ梅。きけぞ口にうるわい
とめりへどもまやアのさよ
じば喰畠れくさきとつまわす
華流み士、れが寺詣とまわ
きりて見きて序とふせられ
きりて大木かでさんとゆふも
山よ入てけりとゆるにあざん

○遠山寺詣序

○一

くえきりはとおゆふと
くとくとくび雪ひ口とゆふ
れいづれくわくわくりくじゆふ
すくとくとくわくわくのほまくふ
くら無事やなんとゆふ
りてひくにまくはくとふ
まくはくとふ

波陽淨林抄解

以

遠山奇談 目次

卷之一

才一章 魔鬼

才二章 新材木と

才三章 遠山の不思議入し半

并に天鵝川

おがきとみ作田村丸石牌の半

才四章 四十八宿の光の山

四十八宿の由来

才五章 杜丹山京洛と里と

卷之二

才六章 林業の既百萬十のもの

第一度水山行船をさくかくの半

才七章 奥山車をつてと小道高

橋脚をもととひはいへ

才八章 山中小そよて一篇

大ひきうる小意の

才九章 大木の半トリ

とんりの後のみ

才十章 小細へすうびくんとふう

○を山奇談目録

○二

卷之三

才十一章 率あらかじめ

ひきそよて又終日

才十二章 ちくづれの るざと山

ち全くされも陰祖の半

才十三章 山中ふ寄り白き

機械ふかうい

才十四章 又怪大なり一

人ごちうなむ

才十五章 山中ふ寄りけふぬあ

才十六章 お食夏のまわる

才十七章 きどんの家ふやう

卷之四

才十六章 お方の便つまみ入

岩表山ふまく

才十七章 天物につまれて考う

才十八章 天狗のとと海のと

才十九章 はとふ食ううどす

才二十章 うなぎのうもとたぬのうのめは

才二十章 太木伏ふせりとふうり

大尾

毛山奇談目次畢

遠山奇談卷之一

○第一章 夜場

天の八つむ。ひとつゆうえの天ふねもやくと野のり
ふたり大出で。そめを夜通つてゐる。都のちまきが
ひく火とろ。かくまく。いもまきを運ぶ。のまふ火
うつ。靈佛靈場す。あけりや。あはれ。天災海湯と焚燒
し。灰燼瓦礫の塵する。ひだり年法ありとせせれ
靈場の神ふるえん。大伽藍アリ。けのやまくや
殿宇あらわく灰燼とやわ。かうとよす。かく
けの橋かけとよみの景まじよほ。とひどめがく
○三

○三

周備滿足の御菴者といつて再び立ちてぞおひ
雨後枝とする。やうに風引れぬ。葉と再びせんざ
えきす。毛衣むづくはすまく。おもむき。まく無
歎胸ふさり。まかたのでくせんとけられた。まれば
大掌がね。五うつ。おもむき。おもひ。仰うべとおもひ
つゝやす。」門脇とおとこはくよく。入室うじ時
兵士ふくめ入をまをゆりたそひぬ。とひらひに
おまく。おまく。おまく。おまく。おまく。おまく。おまく
寝静め。おまく。おまく。おまく。おまく。おまく。おまく。おまく
了り。お骨羅身故ゆふたばに行年よりふねを

すじてやつあまとひつとしとせまふ
紀りとくにかに備ふてあれど實すがんと
おもふ事とぞうそよごとくとく

○牛ニ章 牛材木とたゞ

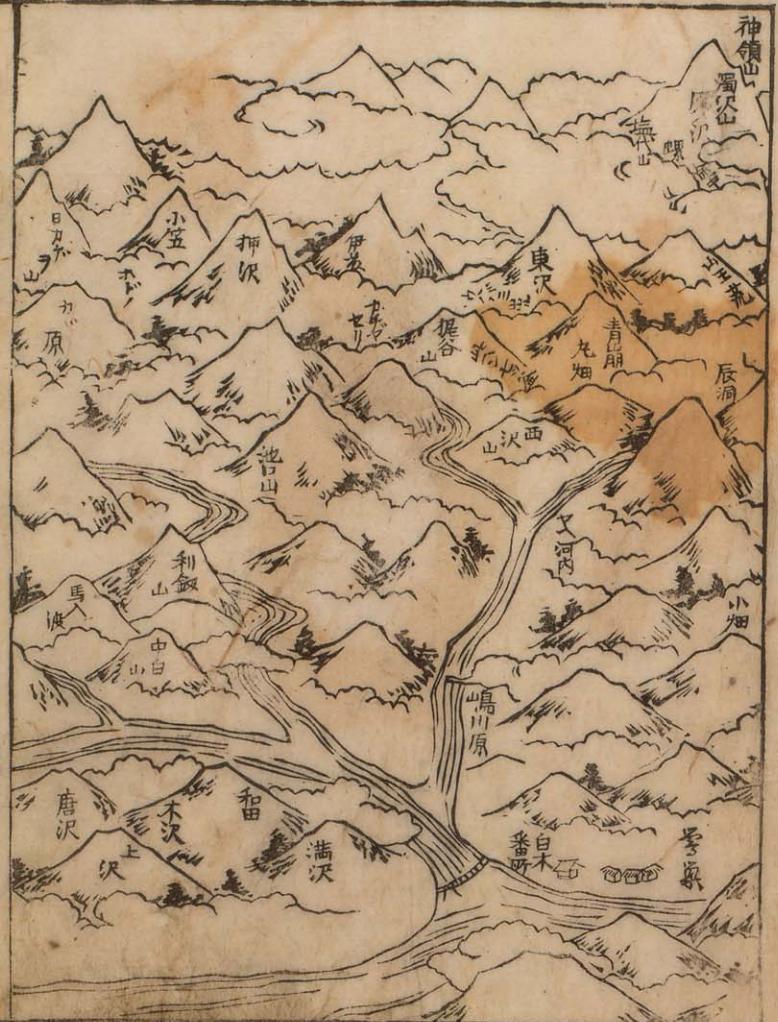
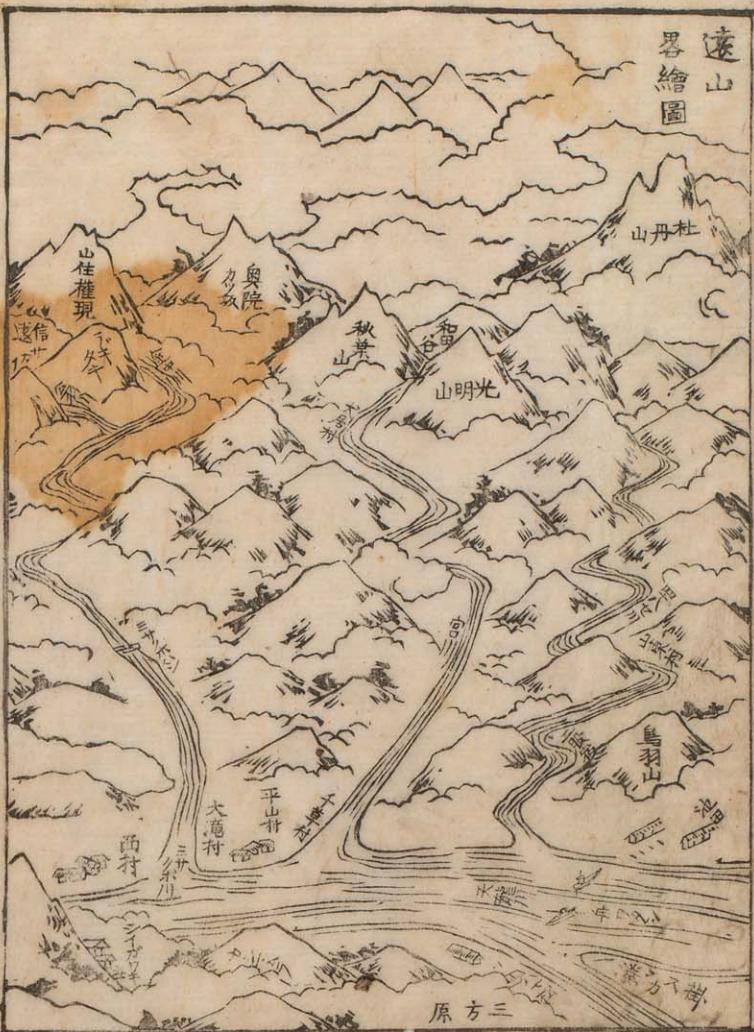
とく御材木のあらわしりたびのすみやだと
とく車とがあれどまへ事實ひむじぬ毛の信物をま
のとととと牛とす

時の天羽八ツ^{スミ}本^{スミ}のとみとみの八
羽^{スミ}のとみとみとみとみとみとみとみと
羽^{スミ}のとみとみとみとみとみとみとみと

遠山畧繪圖

○多毛山考證卷之一

四



○多毛山考證卷之一

八

ゆきよちつふ木と外のすゝめとけり
付の月夜へひよるのぐれもからば起^{ハシメ}よもんと
し遠州佐州の深^{ミタマ}へなりすとんと推草
半株^{ハーフ}のすのをあつてよもんとて甚^{ハシメ}とくにだえ本
あらうやどろきよ^{ハシメ}とてアリよ笑^{ハシメ}とひよれ
安^{ハシメ}くばで日夜とくべくとくふうつやふみま
もむかえ衣^{ハシメ}ふとじ玉^{ハシメ}の竹^{ハシメ}の推草半株^{ハシメ}と黄
玉^{ハシメ}とくじ老^{ハシメ}いはま美^{ハシメ}身^{ハシメ}り^{ハシメ}櫻^{ハシメ}の寺^{ハシメ}と立^{ハシメ}きのゆり
と半^{ハシメ}と奥^{ハシメ}とく^{ハシメ}猪^{ハシメ}男^{ハシメ}とく^{ハシメ}小^{ハシメ}さつに毛^{ハシメ}と
スナ^{ハシメ}と大^{ハシメ}里^{ハシメ}うきよ^{ハシメ}と信^{ハシメ}法^{ハシメ}銀^{ハシメ}河^{ハシメ}年^{ハシメ}發^{ハシメ}遠^{ハシメ}に^{ハシメ}

かくまく凡四十里四方とソヒテハセ遠山といふに
撤の丈至木すはと葉アリトモヤセタケハ渓流の
人を見とみていでア日暮のれりけつたりと歌長
踊躍と云雀越まへ也歌詞と云う所のうて
もやかりたるやうらへと云

○才三章

木五
天終川源阿波大分林田村名石牌

大木あら木多アリシリナリナリナリナリ
ナリセんシニ山折ヒヤモヒ年セヨリスの又宿キマア
黙ねむ往經推移の源ニ希志志希、義セ義セヒ
ナリマリ小七人シガシ鷺ひ御月ハリハ吹小鷺ひ御月ハリ

○毛山音漫卷之一

○六

山入ヘリ付て着トリシムアセ一朝どもハヤシ
法ハキシギ見ヒよに制一必もクモウダハビトド合て
行ちぬ後候候ト立即リリ久里行小鹿崎村ナリキモヒ
天都川ハ日本ナリ大山ナラのモロニ水ヒテ被防の湖水
ナリ涌出トテうん遠ヒ掛原湊ナリセナミの流モハ信濃
三河遠江ナリ張セキ立本ナラシムツ川ハ流リ
ナリナリ材木ナリの貢ヒモリ清瀬所ヒ五色寺セリリ木
権川駿河入野林ト奥ナラシヒ御へ岩瀬ヒテ流リ
水ナリモドリナリ御ヒテアモヒモヒモヒモヒモヒモヒモ

情にて田村將軍つかふ大炮と退路へ向ひたすとては社旗が
石小ほり付けてとさへもよしとぞ石碑の田村丸のままで
と是をよりて今いふ事もかげむるなりて 槍頭を拂ひ去らば
とれどもねど越え二俣宿へとつよ寄つて候とせし

○才四章

四十八川先山ふりよの由来

即月九日いふよ村小かづみ十河の向は四十八川あり はく
いゆてはる川半蔵もすそれより先山ふりよとて下百丁とも
すむひづれ陰姐難切もすむ處ひがきて日新とかを
下あもじしてはるはまおもれすり頂どくは先山大橋の
秋と峯すりまよる殿遠難もすむにわきよきとせんき

○を山あ流卷之一

七

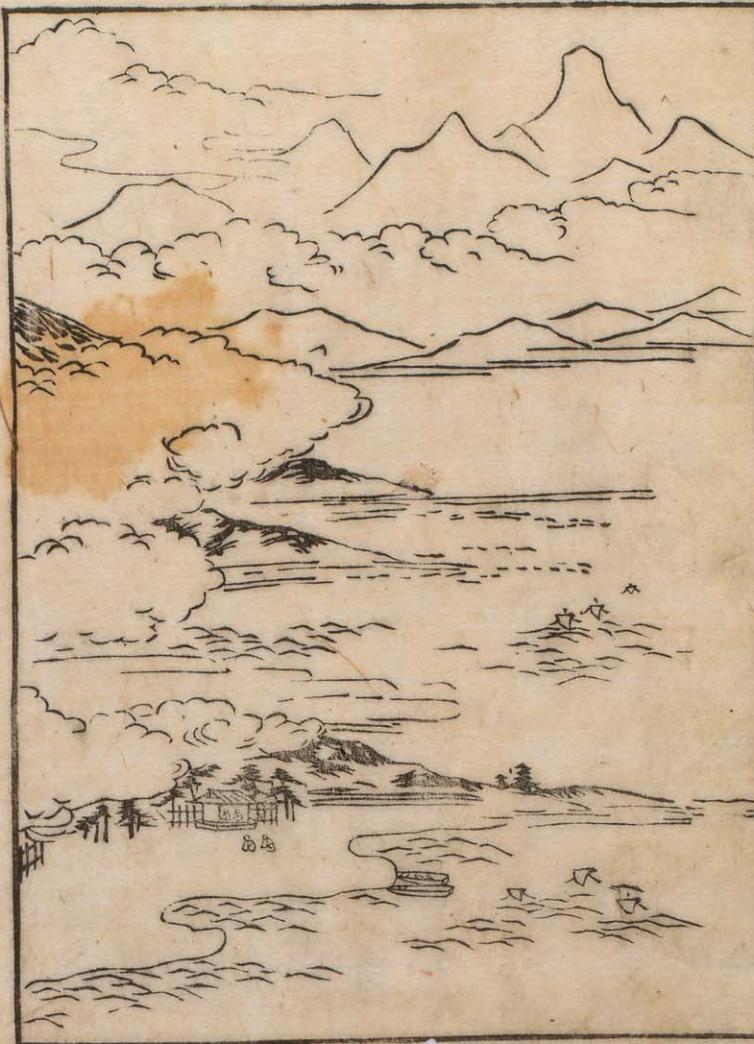
まく庭空飛井と本山堂と 門がふかげづみて茶室庵
かの家のあらび都の清水ふりよすすり壁金うすぶ方うすに不
まくなかて古戰場三方がゑと同前よすすりゑの左側を
素井の湖ち奥石のくのくらと三河岸邊つゝ傍もるう
ひくにちむれ渡太船つむく帆舟もくたうむへはまの
下田の渡まかずつる遠近の風貌もくだけにしたたか峰満と
せりまなづらす後景とせ光明とす大檜檜に穴のぬるあ
うえと見るに元春ま中のひよしや甲斐の信吉はね
柳のむらとくまく時後松根へ光明ふに附とす甲斐松
秋葉とす根をもあふたふひあくまくも互角の事ふ

ねりと進する時甲斐取らず先駆山一押すもす
ありが済ぬ事まなみよすか、居りし本間よりの
士卒をそねてとすたてらむく兵器のまちくれども
はりのそぞり小まことなくならふ甲斐勢及軍主で
さうひうされば利運であるとよづるに全く先駆ち度
の天狗加勢をもさんとほりと安堵すりとさん
けづるのふえつあざれのあるくらふをせぬことふ
るをへん書くれどもく感せぬ

○第久章

だくんふ家毛の里の本

先駆ゆりやまえすす毛嶺畠太龍筋人和田の



谷宿も才八十石さか 大居村おほむら そへみまのよしとく家年
あり ひだり五六十石ごじゆうせき かのそらす こふえいこふえい といふ船ふね あり 大居村
きのむを身み くまきり けふとひふ宿すく あらわに 杜丹だいだん
けふとひふ宿すく あらわの里さと とふそれには丹だん ふ
りへスへス あり それり流なが くこまく てはま門門 の門門 こと
つむれり ふゑ丸ふゑまる の墨すみ はきぬけ里さと のつまくひまくひ
りあらんをり ま保まほ のこう代だい ろうそく せけえいせけえい
網あたご ふり うと あらす こみ奥おく に人家じや あらす と と
サトアリ ふづく そろすの 感覺かく に深か あれど たる
こすり こすり はらむ とほひあらわ に 家居いえ 六石ろくせき
あり 男女六十人じんじん 家いえ あり お合あい す もほ

ナメヌモナリ 男ハ取扱ミテヒケテ ナシモ
女ハ取扱キハ先衣表ハ御城のまゝそてトヨ日え
シムアタク されど後居御殿にゆるトヨ 素小室
ナシシテム うるぬ人の海游あらやまくとみよシ
は里ハくる 今ナリ 人をより除ふとつとひ城ノ忠臣館
ナシシテム と想ひゆく 狂氣もあと絶えとてこれと稱す
ナシシテム と云ひて不といひづれもと文化にあしらひしてけり
ナシシテム ひまの中身とてりや もとさりませ不と
ひうり京もの野とソヒツヘマタ 先帝より大丈人
ナシシテム け山眞ノカとレル 丹青何事アんく
ナシシテム

○毛山寺塔卷之一

十

毛ふりり十六代うり ひまの長とバタフ 18年佑季の
佑季トドヒテ 本堂を拂ひ なまく 伏見と お修へる
あわくと 三井院 がいふかねむけト あわり 本刀一振大刀
一振先後一面 聖嘗葉の御手も二つ 家集 保革と あわ
したるキモ十冊半トモ うす 本刀も力家集 保革 けまつ
はまつと 本作うちひ 伸弓のアモヒキ あさに別本申称してばほ
本作 本宣和本 伸弓のアモヒキ あさに別本申称してばほ
本作 本宣和本 伸弓のアモヒキ あさに別本申称してばほ
本作 本宣和本 伸弓のアモヒキ あさに別本申称してばほ

まわらへて室すりて西鷹の道と同ひとど今の中
代萬の佐小計あぐりと守野幸久へおほく御所を人の
今一社へ三方正面の絵画本を傳へ 画像うる御事へ有す
うる正反のへくに有りて因ひまく は画像とて威を及ぼす
山里の社とて是へばんの木神ありをゆふも
大さうへニよまうりちとれ十石かとからとする木の太さ
とわうとすりて木茎をふく人や伴へゆきそへ 署喰
烟にてすふらうとあくびらうりの法むく
日行けがん山と號じて林ふりすへいつる柳よふ
とりへそりへそりへそり柳林の老樹に嘆びんへそりあかへ
て絵画本を傳へて有る柳よふまものつうとあがたに
たれ柳の根がふ在れり木本とくらて又ふつけ柳よのづる
うらのとくらん木のよふくら柳のとくらうとくらう
○モ山寺後卷之一

○十一

アミク無レドモアヒト林自由すと在居村さく
サウのなれやうとくそりぬれ御子の家めぢやアモ
念佛とぞひまゆりあくされど、うるへふや家育れ
様家うるへとすらむれの時事とくとも全く近材木に
かとせざりとくとくへちぬあどくせびいもくびくとくとく
さて在居村りスナアのゲリと林業の門あくえく
るありとく取とあーぬ



卷之三